

January 11, 2026

エジプトへの旅

マタイ 2:13-15

2:13 彼らが帰って行くと、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。「立って幼子とその母を連れてエジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」

2:14 そこでヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ、

2:15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と語られたことが成就するためであった。

先週は幼子のイエスが東方の博士たちの礼拝を受け、救い主としての栄光が異邦人にも、つまり、全世界に現されたことを学びました。

博士たちの礼拝はマタイ 2:11-12 に書かれていますが、それに続く箇所には、イエスのエジプトへの避難とヘロデ王による幼児虐殺という痛ましい出来事が記されています。救い主が来られ、天使が「神に栄光！ 地に平和！」と宣言したのに、どうしてこのようなことが起こったのでしょうか。また、このことは私たちに何を教えているのでしょうか。

一、闇の力

イエスは「光」として世に来られました。罪の闇で覆われているこの世から闇を追い出すためでした。救いを求める人は、光を求め、光に導かれ、光を見ました。東方の博士たちが星の光に導かれ、幼子イエスにある栄光を見たようにです。しか

し、闇は、光を憎みました。ヨハネ 3:20 に「悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない」とある通りです。

ヘロデ王は、闇を愛した人物でした。博士たちから「ユダヤ人の王」の誕生のことを聞いたとき、自分の地位を脅かすことになるだろう、その男の子を殺してしまおうと考えました。ヘロデ王は、狡猾で猜疑心が強く、自分の地位を脅かす者はたとえ自分の子でも殺したほどの残酷な人物でした。それで、巷では「ヘロデの息子になるよりは豚になったほうがましだ」と囁かれていたと伝えられています。ヘロデは、博士たちから男の子の居場所を聞き出すつもりだったのですが、博士たちはヘロデのもとには帰らず、エルサレムを迂回して自分たちの国に帰っていきました。それを知ったヘロデは、「2歳以下の男の子を皆殺しにしてしまえ」との命令を与えて、軍隊をベツレヘムに送ったのです。

二、闇の力からの守り

しかし、神は幼子イエスを守るために、三つのものを備えてくださいました。第一は、エジプトです。エジプトは古代から続く豊かな国で、このとき、ローマ帝国に押されてはいましたが、古代世界では一定の力を持っていました。また、エジプトのアレキサンドリアは文化の栄えた都市で、そこにはユダヤ人のコミュニティがありました。旧約聖書のギリシャ語訳はそこで作られました。使徒たちはこのギリシャ語訳聖書を使って伝道しました。のちには、クレメンス、オリゲネス、アタナシオス、キュリロスなどの初代・古代の教会の指導者がそこから出ました。そこはヘロデの権力の及ばない安全地帯であったばかり

りでなく、将来の宣教の拠点となる場所でもあったのです。イエスが幼子のときであったにせよ、アレキサンドリアにおられたことには、歴史を導かれる神の不思議な取り計らいを見ることが出来ます。

第二に、神は幼子イエスを守るためにヨセフを用いられました。御使いがヨセフに警告を与えると（13節）、ヨセフはすぐにベツレヘムを発ち、エジプトへ逃れました。14節に「そこでヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ…」とある通りです。聖書には、母マリアの言葉はありますが、ヨセフの言葉はどこにも書かれていません。けれども、ヨセフが神に従ったことは書かれています。ヨセフは口数は少なくても、神に従う人、神の言葉を実行する人でした。ヨセフの即座の決断と行動が幼子とその母とを守ったのです。

スイスの宗教改革者ジャン・カルヴァンは、ハートを神に捧げる絵柄を自分の紋章にしました。そこには “*prompte et sincere*”（速やかに、誠実に）というモットーが記されています。私たちの多くは、しなければならぬと分かっているにもかかわらず、ついつい大切なことを後回しにしてしまうことがあります。もちろん、軽はずみな行動は戒められなければなりません。ぐずぐずしていたために、せつかくの機会を逃したり、他の人に迷惑をかけたりします。また、実行するには実行しても、「なぜ、私だけが、こんなことをしなければならないのか」などと、心に不平不満を持ち、つぶやきを口にして物事をしてしまうこともあります。そんなときは、そのことがもっと辛く感じられます。いやいや物事をする、ちゃんとしたことができません。あとでやり直さなければならなくなり、かえって、大変な思いをすることがあります。いつかはしなければならぬこと

なら、すぐに、どうしてもしなければならぬことなら、誠実に、感謝して、喜んでしたいと思います。その結果は、必ず祝福となって返ってきます。私たちも、ヨセフに倣い、カルヴァンのモットーを自分のモットーにしたいと思います。

第三に神が用いられたのものは、東方の博士たちが献げた黄金・乳香・没薬でした。ヘロデ王が亡くなったのは紀元前4年のことで、ヨセフがエジプトに逃れてからそんなに経たないうちでしたから、エジプトでの滞在期間は長くはなかったでしょう。それでも、ナザレの村での生活や、親族のサポートがあったベツレヘムでの生活に比べ、大都会アレキサンドリアでの生活費は大変なものでした。博士たちの贈り物はその資金になったと思われます。神は、ヨセフがエジプトで家族を養い、イエスを育てるための資金を、東方の博士たちを通して前もって備えてくださったのです。「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」

(ローマ8:28) 神の配慮は、「すべてのこと」とあるように、私たちの日常生活の具体的なことにまで及びます。神を信じ、神に愛されていることを知り、神を愛するようになった私たちは、そのことを体験してきました。神がすべてのことを働かせ、すべてのことを「益」としてくださる。善き神が善きことをしてくださると信じて歩みたいと思います。

三、闇の力からの救い

きょうの箇所は、神が送ってくださった救い主に対する罪の世と悪の力、そのあからさまな憎しみと反抗を描いています。また、そうした中での神の守りを教えています。そして、私た

ちの救い主が、エジプトに下り、そこからユダヤの地に戻ってきたことが、どうしても必要な出来事だったと言っています。イエスが預言された救い主であり、それを成就する方であることが書かれています。15節に「これは、主が預言者を通して、『わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した』と語られたことが成就するためであった」とある通りです。

「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」というのは、神がエジプトで奴隷だったイスラエルを救い、約束の地へと導かれたことを言っています。これを「出エジプト」と言うのですが、「出エジプト」は、イエスがやがて、私たちを罪の奴隷から解放し、「義と平和と喜び」の神の国（ローマ14:17）へと入れてくださる救いの雛形であり、預言でした。イエスがエジプトに下られたのは、このお方こそ、第二の「出エジプト」である十字架と復活による救いを成し遂げる方であることを告げるものだったのです。

そして、この預言は、神の御子であるお方が、私たちに代わって奴隷の立場をとり、世の罪とその結果を引き受け、奴隷のように苦しめられることを示しています。出エジプトのときに、過越の子羊が屠られ、その血によってイスラエルが滅びから救われたように、救い主も、過越の子羊のように十字架で血を流し、その血によって、私たちの罪を赦し、私たちを罪の束縛から解放して下さり、御国へと導いてくださる。イエスがエジプトに下られたのは、そのことの預言であったのです。

人類の歴史は、いつの時代も、強い国が弱い国を従え、世界の頂点に立とうとしてきた歴史でした。イエスがお生まれになったのはローマが世界を治め、ローマの皇帝が思い通りに権力をふるい、すべての栄光を自分のものにし、自らを神として

礼拝させた時代でした。ところが、まことの神、全世界の王、すべての人の主であるイエスは、自ら進んで人々のしもべ（奴隷）となり、ご自分の命さえも差し出されました。きょうの箇所には、ご自分の苦しみを通して救いを成就してくださったイエスのお姿を見ることができます。

この世の罪の闇は、光として来られた救い主イエスに反抗し、イエスを亡き者にしようとししました。実際、イエスが十字架にかけられたとき、暗闇が6時間もの間処刑場を覆い、イエスは死なれました。罪と悪、憎しみと策略が勝利したかのように見えました。しかし、十字架から三日目にイエスはよみがえられました。復活の光が罪と死の暗闇を克服したのです。聖書は言います。「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」（ヨハネ 1:5）

闇に打ち負かされることのない人生、それは、まことの光であるイエス・キリストを信じ、受け入れ、たましいの内に光を持つことによって送ることができます。この闇の深い時代にあっても、イエス・キリストの光のうちを歩むことができるのはなんと幸いなことでしょう。光であるイエスを見つめ、このお方に従うことによって、他の人々にも、この幸いを知らせたいと思います。一人ひとりが、多くの人々にまことの光を示すともしびでありたいと心から願います。

（祈り）

父なる神さま、私たちは、時代がますます暗くなっていくように思える年明けを迎えました。しかし、私たちは希望を失いません。私たちにはまことの光であるイエスがおられるからです。闇は決して光に勝つことはありません。この信仰によって

一年を歩みます。私たちを光のうちに歩む者とし、まことの光を証しする者としてください。主イエス・キリストのお名前です。祈ります。